
私を取り巻く天使達

美空 柚姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私を取り巻く天使達

【Nコード】

N7483Y

【作者名】

美空 柚姫

【あらすじ】

作詞家やカメラマンや詩人を目指して17歳で大阪から状況した女の子に、一目惚れをした男の人。その人とクリスマスにデートをする。その人は実は有名な人気グループの一人だった。彼のグループの仲間と一緒に生活することになり、色んな経験をしながら仲間に昇格していく。女の子は作詞家としてのインスピレーションで第一歩を歩むことになり、彼女自身も歌手になり…恋をし、失恋をし…人間としての成長をしていく。

もうすぐ、クリスマス…（前書き）

恋愛ファンタジーなのか…

読んでいただけたら光栄です！

もうすぐ、クリスマス…

「風が冷たいな…」

12月の風が心も寂しくさせる。

私は坂上柚姫。今まで恋をしたことはない。雑貨が大好きな25歳。

仕事も雑貨屋で華やかな生活を送っている。

12月になり、街は年末とクリスマスに向けて華やかになっている。私は今まで友達か一人でしか過ごしたことがない。

夜の道を歩いているとイルミネーションが輝きを魅せている。

そして、私の雑貨屋でもクリスマスの雰囲気になり、お客さんが沢山来ている。

お店は大きな池の公園に向かっていく道沿いにあるので、公園に来るお客さんも寄り道をする。

私は笑顔で接客する。

今日もお店を閉めて街を歩くと、カップルがイルミネーションを眺めて愛を語っている。

私は独り者

世間で言うなら「寂しい女の子」

でも雑貨が大好きだから、雑貨の中に居られたら寂しさも忘れられるんだ。

17歳で大阪から上京してからは何もかも一人ばかり。

街のイルミネーションを眺めて溜め息をつく…

そんな人波の中の先に、私と同じく一人でイルミネーションを眺めている男性が居た。

ふと目が合う…

ん？あの人もきつと恋人を待っているのかな？

寂しさに包まれ小走りで家路に着く。

テレビをつけるが、見る気はおきない。

リビングのソファーに横になり、クマのぬいぐるみを両手で抱きしめて

「男の人と素敵なクリスマスを過ごしたいな」と笑う。

妄想が出来そうだけど、経験したことがないから漫画やドラマで見る普通の恋愛しか頭に浮かばない。

考えながら…寝てしまった。

出逢い

ある日、雑貨屋に一人の男性が訪れ、スーツ姿がとても似合っていた。

仕事中に関わらず見惚れる。

クリスマスの洋服を着たクマのぬいぐるみを手に取っていた。

「あの人も彼女にプレゼントするのかな？」と思い、話かけてみた。
「プレゼントですか？」

男性は恥ずかしそうに

「あ、ちよつと寄ってみただけですよ」

男性は恥ずかしそうにしている様子で、私は微笑んだ。

それから男性がお店に来るようになり、色々な雑貨の話をした。

男性と真面に話した事が無かったから、毎日がとても楽しい生活になっていった。

私はその男性が来るのが楽しみになっていた。

男性は、私の名札を見て「柚姫ちゃんっていうんだね」と言い

「由来は？」と突然の質問に戸惑ってしまった。

私は隠す事もないと思い

「母が病気で入院していた時に、柚子の飲み物が唯一の楽しみだったみたいで。次、産まれる子には柚の漢字をつかって、女の子だったら姫をつけて柚姫にしたかったそうですよ」

雑貨屋の中でこんな話をしているなんて妙な感じがする。

「この胸のドキドキはなんだろう…」

そして、今日も男性が来た。

「今日はどんな物をお探しですか？」と笑って話しかける。

男性は微笑みながら

「柚姫ちゃんさ？もし、クリスマスプレゼントが貰えるなら何が嬉しい？」

私は考え「個人的に好きな物でいいですか？」

男性は頷く。

私はクマが大好き…

置物もすてがたいが、ぬいぐるみかなと思い

「クマのぬいぐるみです」と笑顔で答えた。

私の答えに笑えたのか男性は笑っている。

私も心から微笑んでいた。

心がドキドキしている。

そして「また来ます」と言って、クマの置物を買って去って行く…

私は後ろ姿を眺めていた。

私の頭の中であの男性の顔が忘れられない。

「素敵な笑顔…」

今日は寒いから長湯でもして楽しもうと歌をうたっていた。

「サントさん…こないかな？」

12月24日、クリスマスイブ

そして12月24日、クリスマスイブ。

街のイルミネーションも凄いが、お店の外をみればカップルだらけだ。

私は凄く忙しかった。

ラッピング作業が担当だったから、お客さんとは対面しない。

「もう、こんなにプレゼント交換しなくなつていいのに!」と思いながらも

一つ一つ丁寧に仕上げていく。

「あ…」

手に取った物は、あの男性と話をしていたクマのぬいぐるみだった。

「この子も貰われていくのか…」

寂しい気持ちはあるが、仕事だから仕方ない。

「クマさんとはお別れだから、綺麗にラッピングしてあげるね」と
気持ちを込めて作業した。

お店の閉店は夜の七時

店長さんが気を使ってくれ

「今日、約束あるなら片付けしなくても構わないわよ」

笑いながら答える

「相手がぬいぐるみなので急ぎませんよ」

そう言くと、店長さんは笑いながら

「だったらさ?女二人で綺麗なイルミネーションを観て、美味しい
ご飯でも食べに行かない?」

考えながら…今日はあの男性に、逢えなかったので少し気分が沈んでいる。

「一人でクリスマスします。気を使って頂きありがとうございます」

と後片付けをする。

お店のシャッターを閉め挨拶をして家路に向かった。

「あ、どうせならカップルが居てもいい。綺麗なイルミネーションを観に行こう」と思い、街に戻る。

イルミネーションは輝きに満ち、周囲のざわめきも一際高ぶっている。

「一人で観るイルミネーション…なんだか寂しくないな」と、周囲のざわめきも聞こえなくなっていた。

その時「…ちゃん？…ちゃん？」

何かが聞こえる

「またカップルの呼び合う声か…」

すると、私の肩に誰かの手がのつた。

振り返ると、あの男性だ。

「柚姫ちゃん此処にいたんだ」

私は驚いて

「なんで此処に居るのがわかったんですか？」

男性は笑みを浮かべ、話し出した。

「前に、イルミネーションの中で君を見つけたんだ。お店に居る時とイメージが違って…」

もうお店も閉まっているし、もしかしたら此処じゃないかと思って…」

なんとなく納得。

ん？待って待って…

この男性は、あの時に目の合った人だったんだ。

驚きながらも、心の中ではドキドキが止まらない。

せっかく逢えたし、話をしようと決めた。

ハラハラドキドキのイヴ（前書き）

男性の突然の告白。

柚姫にとっては初めてで何もかもドキドキ

ハラハラドキドキのイヴ

「今日はどうしたんですか？」

男性が目の前に物を差し出した。

「これを君に渡したくて」

それは、自分が綺麗にラッピングしてあげたクマのぬいぐるみだった。

「えっ？」

男性は微笑みながら

「柚姫ちゃんが、いつもあのお店にいるのは前から知っていたんだ
…気になっていたんだよね」

その言葉に顔が火照る。

「あの…」言葉が出ない。

こんな体験したの初めてだ…困っているのを察したのか、男性が口を開いた。

「この間は、ここで話し掛けようと思ったんだけど…勇気が出なくて、お店に通つても中々相手にされなくてね」

男性は微笑みながら

「気付かなかったでしょ？」

私はコクリと頷いた。

「イルミネーションの中にいる柚姫ちゃんは、いつもよりもっと素敵で…何というか綺麗で声を掛けられなかった」

私は人生でそんな言葉を言われた事はない。

だから、更に驚いてしまった…。

今の状態が、現実なのか夢なのかわからない。

数時間前まで逢いたかった人が横に居る。

放心状態で息ができない…

目のやり所にも困ってしまって、気付いたら私の頬は真っ赤に染まっていた。

男性が話しだし、我に返る。

「あ、はい！」

私の顔を覗き込むように

「だから、お店に俺が通っていたの…気がつかなかったの？」
思わず目が合わせられない。

「…はい」

男性は溜め息をつきながら

「随分前から通っていたんだけどな。君の笑顔が可愛いくってさ」と笑っている。

中々、頭の中で整理が出来ない。

「私…遊ばれている？」

でも、クマのぬいぐるみを貰ったし…優しいし、面白い人だ。

考え込んでいたら、男性は私の前に立ち、恥ずかしそうに

「これから、一緒に何処かに行かない？」と私の手を掴んで歩きだした。

今までとは違う態度に驚くばかりで不安になる。

続けて話し出す

「行きたい場所はどこかある？」

私は現実なのか理解できず、頬をつねりながら歩いた。

「痛い…やっぱり現実なんだ」

男性は、人波をかき分けながら

「俺もつねろうか？」と笑った。

人に頬を触られるなんて…恥ずかしい。
ましてや、手を掴まれる事もなかった。

「大丈夫です！」と大きな声を上げてしまった。

男性は立ち止まり、私の顔を覗き

「柚姫ちゃん、もしかして嫌だった？」

不安そうに見つめてくる…

「あ、いえ違うんです。デートするの初めてなので…」

少し驚いて

「そ、そうなの？俺なんかで良かったのかな？」

私はどう答えて良いのかわからず

「私で宜しければよろしくお願いします」と答えた。

男性は笑った。

「プロポーズの返事みたいだ。俺、一輝。教えてなかったね。27歳だ」

言葉に驚いて

「プロポーズの返事だなんて…」

さらに頬が染まってしまった。

「ご存知の通り坂上柚姫です。25歳です」私は頭をペコリと下げた。

一輝さんは少し照れ笑いをしながら、耳元で「お見合いみたいだな」と言った。

私は顔を見ることができなかった。

一輝さんは下を向いたまま

「何処に行きたいんだっけ？」と尋ねる

私は初めてのデート。

テレビ？漫画？想像した…真似をすればいいんだ！と思い
「観覧車に乗りたいです！」と答えた。

一輝さんは立ち止まって考えている様子だ。

「お台場に行こうか？あそこなら観覧車があるし、ゲームセンターも海もある。綺麗なイルミネーションだろうな」

笑顔で私に話してきた。

私は嬉しくて笑顔で頷いた。

「じゃ、俺は車を持つてくるから、柚姫ちゃんは此処で待っていてね」

私の頭を撫でて、小走りで人波の中に消えていった。

私はまだ心の準備が出来ていなかった。

まさか、私がデートをするなんて…街の雑踏も聞こえない。困ったな…ただ聴こえているのは自分の鼓動だけ。

私は心の中で自分に話しながら、脱力しつつ歩いていた。

どんどん早くなる自分の鼓動が信じられない

頬が赤く染まる

「あんなにお店で話していたとはいえ…さっきまで名前を知らなかった」

「言葉にプレゼントに…驚きの連続。25年間で驚きのクリスマスイヴだわ」と小声で呟いていた…

この気落ち…分かりますか？

その時、遠くから車のクラクションの音が聞こえた。

車は私の近くで止まり、ドアの開ける音。

音の方を見ると、一輝さんが人波を分けて私の所に来た。

「柚姫ちゃん、どうしたの？消えちゃったかと思ったよ」

一輝さんは心配そうな表情をし

両肩に手を置いて頭をくつつけた。

不安な心が安心に変わった。

「心の準備が出来ていなくて…これは夢？」

すると一輝さんは、私の手を掴んで車の助手席に連れていってくれた。

私達は車に乗り込み、一輝さんは前を向いたまま

「本当にデートでいいの？」と言う。

私はコクリと頷いた。

そしてお台場までのドライブが始まった。

私は助手席から外のイルミネーションを楽しんだ。

音楽もイルミネーションを引き立てる洋楽。

一輝さんの運転姿を横目に見る。

ギアを変える左手も、運転する表情も真剣だ。

雑貨屋で楽しく話していた時の姿と裏腹な表情で、胸が凄く締め付けられる。

また胸のドキドキだ…

その視線に気づいたのか、一輝さんは此方を見て私に問いかけてきた。

「柚姫ちゃんは、どうして俺と一緒にデートしてくれるって決めたの？」

その問いかけに悩んでしまった。

心の中で自分に問いかける「どうしてだろう」と悩む。

本当は家でぬいぐるみと過ごす予定だった。

こんな感情は初めてだからよくわからない。

逆に一輝さんに聞いてみた。

「一輝さんと話していたら、毎日楽しいんです。逢えた日は寝るまで胸がドキドキしていて、逢えなかった日は何故か胸が苦しくて…」

私の心の中では、晴れの日もあれば雨の日もあるようです。だから、一輝さんの姿を見ていると幸せな気分になるんです」

一輝さんは私を横目にニコリと笑う。

「こういう感情は初めてなので…よくわからないんですけど、一輝さんにはわかりますか？」

それを聞いた一輝さんは、また私を横目にして微笑んでいる。

「何をそんなに笑っているんですか？私を馬鹿にしていますね」と少し頬を膨らませる。

一輝さんは運転しながら口を開いた

「答えは知っているけど、教えられないな」

ちよつとふざけた感じの一輝さんは、どこか照れている感じがした。そこから凄く会話がはずんだ。

お店に居る時より楽しい…今日の私の心は晴れの様子だ。

一輝さんは色んな話をしてくれ、私も話をした。

お台場までの一時間、二人の距離が近くなったように感じた。

初めてのデートはお台場

所々、場所の名前を教えてくれる。

そうしているとベイブリッジが見えてきた。

私は思わず口を開いた

「凄く夜景が綺麗。こんなに綺麗なのは初めてですよ」

胸が躍る

一輝さんはまたクスクス笑っている。

「お台場に着いたら、もつと素敵な夜景が見えるよ」

私は楽しみで一輝さんにいっぱい笑顔を送った。

今日は来て良かったと、幸せになる。

駐車場に着き、一輝さんが口を開いた。

「着いたよ。行こう」

初めての場所だから少し緊張していた。

車を降りると、一輝さんが此方を向いて指を指す。

「ほら、後ろを向いてみな？観覧車だよ」

私は急いで後ろを向いた。

そこには、猫をイメージしたイルミネーションの観覧車があった。

凄く綺麗で

「わ、猫ちゃん…凄く綺麗ですね。見るだけで乗った気分になります」と騒ぐ。

一輝さんが笑いながら言う

「乗る前からそんなに騒いだら疲れるよ。それに乗るのが目的だからさ？」

凄く楽しい気分になった。

私は一輝さんの両手を掴んで

「嬉しいし、楽しいんですよ」

一輝さんは笑ってくれた。

ふと、手を掴んでいた事に気付कि恥ずかしくなって手を離れた。

一輝さんは落ち着いて

「さ、行こう」と先に歩き出す。

私は呆れられたかと思い、後を追う。

お台場には、色々な施設があった。

某テレビ局も綺麗にライトアップされていた…思わず携帯で写真を撮る。

一輝さんは私が後ろに居ないのに気付き

「本当に楽しそうだね。まだまだこれからだよ」と遠くから声が聞こえた。

観覧車のある場所はカップルや友達同士が多く、人で溢れていた。係りの人が大きな声で叫んでいた。

「只今の待ち時間が、約1時間となっております」

人が溢れているから、一輝さんと私の距離もどんどん遠くなっている。

「あつ」

一輝さんが私の手を掴んだ。

「1時間か…どうする？それに隣に居ないと迷子になる」

また胸がドキドキする。

少し考える。

だって観覧車を遠くから観ただけで満足しちゃったんだもん。

「うーん…どうしよう」と戸惑ってしまう。

一輝さんは口を開いた

「今、混んでいるから先にゲームセンター行こう」と向かう。

そこもやはり人で溢れていた。

人波の中で、少し大きな声で話し出した。

「柚姫ちゃんは、なんのゲームが好きなの？」

元々ゲームセンターに行く機会が無かった。

「よくわかりません。あまり来ないので…」

こちらを向いて

「じゃ、近くから回るか！」と歩き出した。

そこにあつたのはUFOキャッチャーだ。

一輝さんは私に言う

「なんか欲しい物は？取ってあげるよ」

驚いて「そんな簡単に？」

笑いながら

「俺もぬいぐるみとか好きだから、よくやるんだよね。あげる人が居るからさ」

その言葉に胸が痛む。

小声で「あげる相手が居たんだ…」と悲しい顔をしてしまった。

イヴを楽しもう！あれ？一輝さん、何処かで…（前書き）

一輝のぬいぐるみをあげる発言で、柚姫はショックを受けていたが

一輝は柚姫の為にぬいぐるみをとってれると言う

柚姫はせっかくのイヴだから、楽しもうと考える。

ぬいぐるみをあげる相手…彼女？

イヴなのに彼女は？と考えすぎる

イヴを楽しもう！あれ？一輝さん、何処かで…

一輝さんはそれに気づいたのか

「今日は、柚姫ちゃんの為に取ってあげよう」とやる気のある言い方をする。

私も今日はせっかくだから楽しもうと思い

「ぬいぐるみがいいです！」

私達は凄く楽しい時間を過ごした。

「こんなに沢山。有難うございます！」

両手で抱えて笑顔になる。

一輝さんは

「それさ？車に置いてくるから、ジュースでも飲んでなよ」と車に向かつて行った。

私はカップルや若い子達の中で、一人でジュースを飲む。

飲みながら会話を思い出した…

また私は小声で話していた…

「ぬいぐるみをあげる相手が居るのに、どうしてデートに誘うんだろ…暇つぶし？でも今日はイヴなのに彼女は？」

頭の中がごちゃごちゃになってしまった。

近くのテーブルに若い女の子たちが座っている。

聞こえてくる会話が痛かった。

「その女の子の人、お台場に一人で来ているよ」

すると一輝さんが戻ってきた。

「お待たせ。一人で寂しかった？」と笑いながら言う。

「そっそんな事ないですから！」と驚いて真剣に言ってしまった。

一輝さんは少し驚いた様子で

「なんかあったの？」と聞いてくる

我に返った私は

「何もないですよ。ただそこに居た子達が私の事一人で来ているって言っていたから」

一輝さんはふと笑った。

「じゃーこれ！」と、顔の目の前にクマのぬいぐるみのストラップを見せた。

「二つお揃いで取ったからあげるよ」とニコニコ笑う。
凄く嬉しくって

「いつの間に、取ったんですか？可愛いですね」と、さっそく携帯に付ける私達。

心の中では…またさっきの話が脳裏に浮かんた。
お揃いにしたら、彼女にもうしわけない…

一輝さんが話し出した

「今、観覧車35分待ちらしいけど、行く？」

ふと思った、観覧車は二人きりで乗るの？
どうしよう…なんかされたらと不安になる。

「そっそっですね。今、行きましよう」

一輝さんはそれを聞いて席を立つ

私はその後姿を追う。

観覧車の行列は凄かった。

「わ、こんなに並んでいる…」

一輝さんはこちらを向き

「大丈夫だよ。すぐだし、安心しな」

「安心？」と聞き返す

私を見て口を開く

「何かされると思った？」と笑う。

少し呆れた私は

「一輝さん、やっぱり馬鹿にしているでしょ」と笑ってしまった。

待ちながら、海の夜景を見る。

「綺麗…」

何故か会話が出来ない…私はどうやら緊張しているみたい。
どんどん列が進み、自分達が乗る観覧車がきた。

係りの人が

「今夜は混んでいるので、三組の6人で乗ってもらいます」と。
結局、最後に乗った私と一輝さんは向かいの椅子に…

他のカップルは、夜景を観ながらコソコソ楽しく話している。

たまに一輝さんを見ながらゆっくり回る観覧車を楽しんだ。

一輝さんもカップルを横目に、私を見ながら夜景を楽しんでいた様子だ。

目が合えばニコリと笑う。

そつえば…一輝さんを見て気づいた、深く帽子を被りめがねをかけている。

変装？考えすぎたと思いながらも、彼女にバレたらまずいからかな…と心で思う。

観覧車は15分で一周してしまった。

階段を降りて行くと係りの人が尋ねてきた

「記念写真はどうですか？」

どうしようと思いながら考えていたら

一輝さんが係りの人に

「お願いします」

ますます彼女に怪しまれるんじゃない？と思った。

写真を撮る時に一輝さんは帽子とメガネを外した。

「あれ？」

やっぱり、どこかで見たことのある顔だ。

通り過ぎる人達は、此方を見てコソコソ話をしている。
なんでだろう？

「笑って」と一輝さんが耳元で言う。

ふと我に返り笑顔で写真を撮り、貰う…でも一枚だけ。

「それ、あげるよ」

嬉しくて

「部屋に飾ろう！」と騒いでいた。

歩きながら写真の話をしをする

「一輝さんって、何処かで見たことがあるんだけどな…お店に来る前にどこかで逢いましたか？」

その言葉に一輝さんは笑みを浮かべ

「気のせいだよ、ありきたりの顔だから？」と帽子を被り、メガネを掛けた。

浜辺にて1

歩いていると、お台場の海の浜辺に着いた。

そこには多くのカップルだと思われる二人組みが座り込んで
夜景と会話を楽しんでいる。

「そこ空いているから座ろう」と言われた。

何故か車で話していた時のように楽しく話せない。
緊張かな？と思いながら横を向くと

一輝さんは海を見つめていた。

「一輝さん、何でこんなに私に優しいんですか？」

軽く溜め息のように息を吐きながら

「車の中で、柚姫ちゃんに俺に質問したでしょ？感情の話…その気
持ちは俺も同じだから」

と私を見つめた。

なんとなく納得するけど、答えを聞いてないからわからない。

「その答えを教えてください」と聞いてみる。

一輝さんは「まだ教えない」と笑う

やっぱり遊ばれているのかな…

浜辺にて2

二人で海と夜景を眺める。

沈黙を海の波が消してくれる

両隣にいるカップルは楽しそうに会話をしている。

そんな光景を羨ましく見つめていた…

「海は綺麗だね」と何故か寂しそうに言う。

一輝さんを見たら、海とベイブリッジの夜景が一緒に映り

また胸がドキドキする。

ふと気づく、この気持ちはドラマや漫画で見る恋なのかな？

でも、一輝さんも同じ気持ちって言っていた。

彼女がいるんだから違うか…

一輝さんが私を好きはずはないと…

「綺麗ですよね」と一輝さんと目が合う。

浜辺にて3

「あっ」二人同時に声が出た。

それは12月に珍しい雪が降ってきた。

「雪か…しかもイヴに。めずらしいな。この状況で…なんかロマンティックだ」

そんな一輝さんをみると

やはりどこか寂しそうだ。

私はそう思い

「一輝さん？本当はぬいぐるみと過ごすはずだったんですよ。でも、此处に来てとても幸せ」と笑う

「でも、一輝さんは寂しそうです。何かあったんですか？」

下を向いている一輝さんの顔を下から覗き込んだ。

その視線に気づいたのか、一輝さんが話し出した。

「好きな仕事なのに行き詰っていてね。でも柚姫ちゃんと逢って話していると安心するんだ」

浜辺にて4

そういえば、一輝さんが何の仕事しているのか知らなかった。

「何の仕事をしているんですか？」

私の頭を撫でながら

「うーん、いまは内緒かな。言えるのは人を幸せにする仕事かな」

私は深く聞くつもりはなかった。

「今日イヴですよ？彼女と過ごさなくても良いんですか？」

その質問に驚いたのか

「彼女？」

逆に私も驚いて

「はい。ぬいぐるみをあげる相手が居ると言っていましたよね？彼女ですよ？あ、でも私もプレゼント貰った…」

私は何を馬鹿な質問をしているんだと、後悔してしまう。

一輝さんが溜め息をつきながら

「まだ伝わらないのかな。ま、今はそつとしておこう」と私の頭を撫でた。

一輝さんは優しい心の持ち主

よく言っていることがわからない。
私は上手く整理ができないみたい。

急に一輝さんが立ち上がり
「コンビニで暖かい飲み物を買ってくるから…待っていて」と走って行った。

走って行く後ろ姿を見ていたら、一輝さんのバックが目に入った。

そこには一冊のノートが…
「なんだろう？」と思いながら開いてみた。

そこには詩が沢山書いてあった…
「綺麗な字だ」

一つ一つの詩がとても素敵な詩だった。

切ない詩も楽しい詩もあった。

読み始めるとその世界に引き込まれた。

私は夢中になって読んでいる。

一輝さんは、私が無気なくノートを読んでいる事に気付き、後ろのイスで様子を伺っている。

何ページ読んだかわからない。

でもわかったのは、一輝さんの心は優しいという事だ。

25年間生きてきて一番楽しいクリスマス

ふと我にかえって、一輝さんの帰りが遅いことに気づく。

周りを見渡してみると一輝さんが後ろで私を見て笑顔を送ってくれた。

「やっと気づいた。どう？感想聞かせてよ」

読んでしまったことを悪く感じ

「すいません、つい手が伸びてしまって。一輝さんは詩人ですか？」

私の答えに笑いながら「そうかもね」と答えた。

呆れられたのかと思って

「でも、凄く感動しました。詩の世界に吸い込まれて…切ない恋をしているんですか？こんな切ない恋の詩を読んだことがなくて」

本を抱えながら、自分の過去を思い出し涙が出そうになった。

一輝さんは私の横に座り聞いてきた。

「普段は詩とかに興味はない？」

私は上手く言葉がでず

「あまりテレビも本も見ないので…詳しくわからないんです」

一輝さんは海を眺めながら

「そっか、じゃー俺のこと知らないはずだね」

ん？どうゆう意味だ？

テレビに出ている人なのかな？

そんなわけないか…

「本を出版しているんですか？有名な詩人さん？」

すると、考え込んでいるのが伝わったのか

一輝さんの手が私の頭に乗った。

思わず「え？」と驚いてしまった。

「深く考えないでいいよ」

また一つ、一輝さんの事を知れてまたドキドキする。

すると一輝さんはノートをバックに戻し

「もうこんな時間だ。そろそろ帰らなくて大丈夫？」

気づくと24時を回っていた。

「そろそろ帰らないといけないですね。明日も仕事です」

「俺は夕方からだよ」と笑う。

私と一輝さんは車へ向かった。

その時、観覧車はイルミネーションを消して暗闇の中に姿を隠していた。

今日のお礼を言おうと思いい口を開いたら、一輝さんが話し出した。

「今日はありがとう。楽しかったよ、また一緒に出かけてくれる？」

私はまた一輝さんに逢えると思い

「私でよければ是非、誘ってください」と答えた。

二人でニコニコして歩いた。

帰りの車の中でも楽しく話が出来て、とても幸せだった。

25年間生きてきて一番嬉しいイヴだった。

「それが一枚の写真によって、これから私達に試練が訪れることも知らず」

一輝さんの本当の姿

お互いの連絡先を交換し、ぬいぐるみを貰った。

車から降りる前に、一輝さんは私の頭に手を乗せて「またな」と言っ

た。「また遊びましょう。良い夢をみてください」と言っ

て。家の明かりを点けて、自分の部屋を見渡すと…

一人になったんだと何故か寂しくなった。

「やっぱり、一輝さんに恋をしているんだ」と気付く。

でも一輝さんの気持ちがわからない。

「私の質問と同じ気持ちって言っていたし、でも答えてくれなかつたな」

考えながら、シャワーを浴びベットに入る。

今日はクリスマスだ。

昨日のデートが頭から離れず…仕事中にも関わらずニコニコ笑っていた。

今日も呆れる程のプレゼントの数。

でも、一昨日とは違って世の中の幸せな女の子になれた感じで嬉しかった。

仕事中ズボンに入れている携帯のバイブが鳴っている。

「こんな昼間に誰だろう？」

私の嬉しい笑顔に、店長が気づいたのか話しかけてきた

「柚姫ちゃん、なんか嬉しい事あったの？」

その返事に笑顔で

「昨日、王子様に逢ったんです」と微笑みながら答えた。

案の定、店長がその話に食いついてきた

「どんな王子様なのよ」

私は頬を赤くしながら話を続けた

「いつも来るお客さんですよ。よく喋っている人わかりませんか？」

ニコニコしながら話している内容を聞いて

店長さんが顔を苦くした。

「あの歌手の人ね。あの人、すごく冷酷らしいわよ。ファンの子に對してもかなり冷たいらしいわ。でも、このお店に居るときは笑顔よね？実際はどんな人なんだろう？あつ女優さんと付き合っているみたいね」

驚いて「女…女優さん?!」

店長は続けて話し出す

「そうそう、よく週刊誌で密会写真乗っているわよ。優子っていう女優さんよ」

「ん？彼が王子様なら、何かあったの？」

私は胸が苦しくて動揺を隠せず

「いえ、たまたま道で逢って、話しただけですよ」と無理やり話す。

心の中で、一輝さんは歌手？

しかも性格悪い？

そんなはずはない。

昨日はあんなに優しかった。

でも彼女が居るなんて…

だから変装していたのかな…

心のもやもやが取れない。

好きな人が歌手だなんて…

次元が違いすぎるし、彼女も居るんだ。

恋を諦めよう…

「諦めよう」

私は遊ばれていたのかと思いながら
お店の裏口に出た。

今日はそういえば顔を出してくれてないな…

携帯が鳴っていたことに気づいた。

一輝さんからのメールだった。

店長の話聞いたばかりだったから、メールを開くのが怖かった。

何を書いてあるんだろう…

勇気を出してメールを開いてみた。

「柚姫ちゃん、昨日は有難う。よく眠れたかな？俺は寝すぎたよ。
久々に幸せな時間を過ごせて安心したのかも。今日は夕方から仕事
だよ。お互い仕事がんばろうね 一輝」

私は手が震えていた。

有名な歌手さんで…

しかも性格悪い…？

でもこんなに一輝さんは優しい。

ついでに携帯で「一輝 歌手」で検索してみた。

すると検索ができなかった。

「…なんでだろう?」

あんなに優しい詩を書く人…性格が悪いわけが無い。

女優さんにぬいぐるみをあげているのかな?

また胸が締め付けられる…嫉妬?

その時、店長さんが現れ

「柚姫ちゃん、顔色悪いよ?体調悪いの?今日、早退したら?」

そんな店長の声が聞こえず「え?」と聞き直し

店長の言葉にコクリを頷き早退することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7483y/>

私を取り巻く天使達

2011年11月30日19時59分発行